

「旅順博物館所蔵梵文法華經断簡」〈写真版及びローマ字版〉

— 旅順博物館・創価学会 協力出版に寄せて —

# 『法華經』写本研究の現代的意義

池田大作

古来、『法華經』は経王と呼ばれてきた。なぜ、『法華經』が諸経中の王なのか——。開三顯一等、いわゆる「開會の法門」によるところが大きいことは論を待たないであろう。「開会の法門」とは、他者を否定し、排除する冷徹なる論理ではなく、宇宙の森羅万象を慈愛で生かすゆく王者の思想である。

この法門は「一乗思想」ともいわれる。「二乗」とは、

一仏乗、すなわち、万物を平等なる智慧と慈悲で包括しゆく、無限に開かれた一大乗の思想を意味する。それ故に、『法華經』の統一的精神は、分断と抗争の悲惨をいやし、苦悶を超克しつつ、ダイナミックな調和と安穩をもたらす源泉となる。そのことは、『法華經』の統一的法門に対して、血なまぐさい犠牲ではなく、音楽や舞踏（大正蔵九卷四三頁下等）が供物として捧げられることか

らも理解されよう。音楽や舞踏は、躍動する生命の象徴であり、喜びと感謝、文化と平和の象徴である。

今、世界は、不透明な“混迷の暗雲”に覆われている。二つの原理を基礎とした二つの陣営の対立の時代は終わったものの、そのことがかえって、人類史の深層に潜在してきた憎悪と暴力性による“分断と分裂のエネルギー”を顕在化するに至っている。民族、文化、宗教、人種の「差別化」による“分断”の亀裂が、いく重にも、人類意識を引き裂いている。その“亀裂”は、生態系にまで及び、大自然のカタストロフィーをも引き起こしかねない状況である。

そこから、現代世界が抱える問題群——地域紛争、経済格差、人口激増と飢餓、また生命倫理や環境倫理への難問が、一国、一地域の範囲を越えて、人類総体に迫っている。

ここに、地球的問題群の基底にある“分断と憎悪のエネルギー”を超越し、慈悲による統合を可能にする思想的、哲学的基盤が希求されてやまないゆえんがある。

『法華経』に説かれる「二乗開会の法門」は、“新たな

る世紀”を開くために、まさに“無明”のなかに差し出された“光明”となる思想ではなからうか。

現代は、「自分は何のために生まれてきたのか」という問いを忘れた時代である。自己の生を支えるものに対するこの根源的問いかけを忘れた時、人間はしばしば、ナシヨナリズムなど、偏狭なイデオロギーの陥穽におちいることになる。

『法華経』從地涌出品には「是れ何れの所より来れる何の因縁を以ってか集れる」（同四〇頁中）との問いが表れる。もちろん、一義的には地涌の菩薩の出現の意味を問うたものだが、これに対する一つの解答は、順序は逆になるが、すでに方便品に表れている。

方便品では、諸仏が出現する「一大事因縁」（同七頁上）を明かす。そこには、釈尊の伝道宣言（『律蔵』小品）と同じ言葉が記されている。

「人々の幸福のために、利益のために、安樂のために」  
仏は出現したと（ケルン南條版四二頁二二—二五行）。

人種、民族、国家を超えたコスモポリタンとして、“民衆”の幸福のために、諸仏は地球上に出現する——

大乘仏教において菩薩道として結実した人間の「本来的使命」の高らかな宣言である。

私どもが信奉する日蓮は、自らを「法華経の行者」と称した。それは法華経の「一仏乗の思想」を身読した激闘から生まれた金句である。その故に、日蓮は時の為政者から二度にわたって流罪を宣せられた。

創価学会は、この日蓮の精神を受け継いでいる。

牧口常三郎初代会長は、第二次世界大戦中、『法華経』の「一仏乗の思想」を受け、日蓮の精神のままに、狂信的な軍国主義と対決し、信念に殉じた。後に第二代会長となった戸田城聖も、同じく獄に入った。

戸田城聖は、社会から悲惨と不幸をなくさんと、敗戦後の焦土に一人立った。創価学会は、この初代、二代会長の精神を継承すべく、世界に『法華経』の精神を基調とした平和・文化・教育の運動を展開している。

今日、『法華経』に説かれる「開会の法門」を人類的に展開するにあたって、『法華経』の歴史的研究は、不可欠の学問であり、その土台こそ、「写本」の解読とその比較研究であると位置づけられよう。東洋の諸民族へ

の「一乗開会の法門」の具体的展開を研究することにより、人類救済への貴重な「教訓」を得、未来へと生かす智慧を発掘できるからである。

具体的にいえば、まず第一に、諸写本の比較研究によって『法華経』の成立、並びに伝播の系譜をたどることができよう。言語学的手法によって、この分野の研究に、先駆的役割を果たされた北京大学の季羨林教授をはじめ、斯界の研究者の方々に、私は、深甚の敬意を示したい。

第二に、各地域において出土、あるいは保存されている『法華経』の「異・同」を分析することによって、諸民族や文化の「多様性」に応じて『法華経』がどのような変化・対応してきたかを知ることができよう。

その上に立って、第三には、独自の文化をもつ諸民族の歴史と『法華経』の関係を分析することによって、「一乗開会の法門」が民族文化の形成にどのように寄与してきたかを、分析することもできるであろう。

第四に、『法華経』の伝播史から、歴史の「教訓」を

引き出すことによって、地球上の多様な文化圏の差異に応じて、それぞれの特質を生かしながら、包括的に“人類意識”を涵養する方途をさぐることも可能になるであろう。

二十一世紀にむけての『法華経』研究は、人類の英知を結集した「総合的法華学」の様相を呈することを期待したい。その学問的基盤を作るところに、法華経写本研究の根本的な意義が見いだされるのである。

今回の法華経写本プロジェクトは、王震中日友好協会名誉会長（当時）から、北京民族文化宮所蔵の法華経写本の精密な写真版を贈られたことが、一つの契機となっている。更に、季羨林教授、中国社会科学院の蔣忠新教授には、写本研究に関してさまざまな助言と協力をいただいた。この「旅順本」出版に当たっては、旅順博物館の劉廣堂館長に多大のご尽力をいただいたことに、深く感謝したい。

東アジアのみならず世界の平和と安定のために、日中間の一層の友好が望まれるが、今回の写本出版は、日中の友好交流の一つの見事な“果実”である。更に、この

プロジェクトが、一段と深い交流、相互理解のための一ステップとなることを願ってやまない。

（いけだ だいさく・創価学会名誉会長、

創価学会インタナショナル会長）

（本稿は、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡（写真版及びローマ字版）』の「巻頭の辞」を転載したものです）